国際協力の見聞を深める

11 大正大学人間環境学科のユニセフハウス見学

報告者　大正大学　人間学部人間環境学科こどもコース　西郷　泰之　先生

1、自己紹介

こどもコースとは？

正式には大正大学人間学部人間環境学科のびのびこどもプロダクトコースといいます。こどもに関する教養教育コースです。保育士などの資格取得に力点を置かず、子どもに関して広く学んでいます。学習テーマは、遊び、子育て応援、ビジネス、国際協力の４つです。１・２年では幅広く学び、３・４年ではこの４つのテーマの中から一つ選び、専門的に深めて行きます。

国際協力の視点

こどもコースのテーマの一つである国際協力に関しては、１年生に対し毎年11月から７回（33時間）の授業を行っています。公的機関であるユニセフを皮切りに、ＪＩＣＡ、国際ＮＧＯであるワールドビジョン、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、和製ＮＧＯであるシャンティ国際ボランティア会などにレクチャーをお願いしています。これらの授業は、子どもの権利保障であることを軸にすえています。

国連は何をしているか？

今回のユニセフハウスの見学のねらいは、国連はこどものために何をしているかを学ぶことにあります。国際協力の全体像を学んでもらい、今後の国ごとの取り組み、ＮＧＯの取り組みの学習を進めるためのマップを手にしてもらうためです。展示物の見学と説明により目と耳から学習したとともに、日本ユニセフ協会の職員の方に、国連の事業概要のレクチャーをしていただきました

2、ユニセフハウスの見学

ユニセフの活動を紹介する施設として、品川駅高輪口の近くにユニセフハウスがありました。館内では、開発途上国の保健センターや小学校の教室、避難民キャンプのテントなどが再現されていました。学生たちは、11月21日、展示案内のボランティアの方による説明や日本ユニセフ協会の職員の方の講義をうかがいました。

ユニセフの使命について聞く

（１）ユニセフの使命とあゆみ

ユニセフ（国際連合国債児童緊急基金）は、第２次世界大戦が終った1945年、世界を巻き込んだ戦争を２度と起こさないという目的で国際連合がつくられ、1946年の第１回の総会で当時戦争の被害を受け、苦しい状況にある子どもたちを緊急に救援するために創設された組織です。戦争で被害を受けた子どもたちが元気になりつつあった1950年ごろ、ユニセ

フはもう役目を果たしたのでいらないのではないかという意見もでたとのこと。しかし、開発途上国に住む子どもたちは。戦争で被害を受けた子どもたちのように厳しい状況にあることが伝えられたことから、ユニセフは緊急救援ではなく、開発途上の国ぐにで長期の計画にもとづいた子どもの事業をするようになったとの説明がありました。1953年UNICEFのＩとＥがとられて、現在の呼び名であるUnited Nations Children's Fund（国際連合児童基金）と改められています。

世界地図を前にして

（2）世界地図

ユニセフが現在事業をしているのは150以上の国と地域で、赤色灯で知らせている地図があります。そして、事業をすすめる時に考慮することは①５歳未満の死亡率②国民ひとりあたりの所得③子どもの人口の３点です。国内委員会は36の国にあって、その国の人びとにユニセフの活動や世界の子どもの現状を伝えてユニセフ募金の窓口になり、さらに政策提言などの仕事をしています。ユニセフが活動している国ぐにの基礎的な情報はこのコントロールボードで見ることができました。

守るべき子どもの権利の前で

（3）守るべき子どもの権利

ユニセフが活動の基盤としているのが「子どもの権利条約」です。子どもの権利はおおまかに、①生きる権利（生存）②育つ権利（発達）③守られる権利（保護）④参加する権利（社会参加）の４つに分類することができます。ここでは、ユニセフが活動の基本としている「子どもの権利条約」の条文を紹介していて、権利条文ボードの窓は見学者自身が開けて楽しめるようになっていました。

（4）開発途上国の保健センター

開発途上国の保健センターのコーナーでは「生きる権利」について学ぶことができました。５歳の誕生日を迎えられずに亡くなった子どもは１年間で約760万人。約４秒に１人が防ぐことができる病気で命を失っています。ここでは、予防接種のワクチンが携帯できる保冷箱に入れられ世界の国々へ運ばれている説明を受けました。また、ベッドに足を乗せるための台がついたシンプルな分娩台があり、これにより安全な出産ができることについても説明がありました。ユニセフは子どもの権利を基礎にしたライフサイクル（成

子どもの命を守る発育観察グラフ

長過程）に合わせて保健、栄養、水と衛生、教育、福祉の事業を適切な時期に支援をするようにしています。ここでの展示も子どもの成長に合わせた年齢別の対応で展示してありました。

15kgのネパールの水がめ

（5）ネパールの水がめ運びの体験

ネパールで使われている水がめが展示されていました。この水がめは、空の状態でも約2.6kgもあり、水を入れると15kgにもなります。開発途上国では、水くみは女の子や女性の仕事と考えられることが多く、非常にきつい仕事です。子どもたちは、一日何往復もして、家族のために水を運びます。過酷な水くみにより、学校に通えない子どもをなくすため、ユニセフでは村に井戸を作り、安全な水の大切さを伝えていることを学びました。

ベトナムで使われている教材を見る

（6）開発途上国の学校を模したコーナー

ここでは、「育つ権利」について学ぶことができました。開発途上国では、６千７百人もの子どもたちが、学校に行きたくてもいけない状況にあります。その理由としては、家が貧しくて靴や文具が買えない、家事が忙しく学校に行く時間がない、近くに学校がない、授業がつまらない、家計を助けるために働かなければならない、など様々のようです。

テント内での説明を聞く

（7）避難民キャンプのテント

避難民キャンプのテントをを通じて「守られる権利」を学びました。実際のテントの中に入り、説明を聞きました。テントの中には、調理器具、乳幼児の衣服、栄養補助食品や水などがあります。戦争や紛争が起こったとき、地震や洪水や台風などの自然災害が起こったとき、ユニセフは政府の要請で緊急救援の活動を開始するそうです。コペンハーゲンにあるユニセフの物資供給センターから48時間以内に届けることができるとのことでした。

ホールでの講義

（8）日本ユニセフ協会職員の講義

展示案内を終えた学生は、ユニセフハウス１階のホールで、日本ユニセフ協会職員から「ユニセフ事業の概要」についての講義を受けました。展示案内で受けた知識をもとに、さらにユニセフの使命やあゆみ、日本とのかかわり、ユニセフ募金の使われ方などについての話を聞き、ユニセフについての学習を深めることができました。

３、参加者の感想より

学生の感想の一部を紹介します。展示物の見学と説明については

・銃のレプリカの迫力「あの銃を持って子どもが戦争に出ていると考えると衝撃である」
・日本の技術が蚊帳に生かされていることを聞き感動した
・本物に直接触れられたことで感動した

国連事業の概要に関するレクチャーについては

・ユニセフの初代事務局長の言葉「子どもには敵も味方もない。困っている子どもがいれば誰でも助ける」が頭に残った
・女性教育により死亡率が低下することに驚きました
・ユニセフで働いてみたいと思った

４、まとめ

見学コーナーでは手に入りにくい「実物」が数多く並べられ、とても臨場感があり、説明をあわせて聞くとユニセフの各国での活動の状況が具体的にイメージができたように思います。またユニセフの事業や日本ユニセフ協会の活動、とりわけ東日本大震災の被災された子どもたちや家庭への支援も含めわかりやすく丁寧にレクチャーしていただき感謝しています。

今後とも、難しいことでもリアリティを持って、わかりやすく説明していただけるよう期待しています。ユニセフハウスの皆さまありがとうございました。